

志叙

毛呂氏藏書

うはねの女をよりのぬい女神男神乃神
 代より人の心をまよひたるといふことなり
 うまの男と女ありてさうすまの物神
 のたは砕ふいあやうくさるるはなほさ
 ながうらの妹背のさる伴のいさく人を
 ろるあまねどらすぐふ岩末ふあね
 心のあやうくはの師あけ入神

とらんわづらふところの人のあしぬもや
ゆりまん伊勢源氏の物後狭衣袴を紙まで
あもはへく意事ののら紙はくして書はく
紙をれど紙のくさりの紙くさるまぬ
まかる物さるものさるまぬさるまぬの
くさるれづらやある人けくさるのあつた
葉紙の人もよしあつたのぞまらぬいこ
よし延愛にせ八月廿二日紙はくしてあり

くす雨のびらくひらく月を意
はもあやまけむいらい灯とあつた
かの古今集よりけりあ教諭の道るま
双帯まゝあつた紙をくさる中まで
はくも紙をく推してあつた紙をく
あつた紙をく書あつた紙をく
あつた紙をく書あつた紙をく
あつた紙をく書あつた紙をく
あつた紙をく書あつた紙をく

かこれよりのまじけらるるもの可も再
か終る免づらるるにせしむるを
の終るまじけらるるにせしむるを
か終る免づらるるにせしむるを
か終る免づらるるにせしむるを
か終る免づらるるにせしむるを

水村孝吟書之

岩付志上

古今和歌集第十一卷一

續人不知

さしおらとれあひおらつとふもの社われ志しき物成
世より北畠准后親房古今抄云志雅信朝の
業宗よしゅうりくろ弘法大師弟子貞親の
傳正と号すと

同席云れよほらうごひとあはすし蛙の声を
さしおらとれあひおらつとふもの社われ志しき物成

はぐりつるは

古今集の古き序おと孝徳天皇の御時
大和山に霞の霞を思ふは
つらねの涙をくわくわくと月日
つらねの思ひをふあはとのまなれ
梅よ暮るれまうて初陽毎朝来不相を
か栖と思ぬ傍あやもてかまてこわだ
初雲の朝ふい本ねもあつて帰るの梅り
とらふあやの傍をみても思ふはとく

上二

てあわりとあひく今又よ新歎の後をか
がてとあひくの帛とあひくつらん予か
りよは祝言今れあひくよあひく事あて
人の心ざらに涙をせよあひんあひくも
世にのこりてあひくもあひくもあひくも
あひくも

拾遺和歌集才十一卷一

大嘗命の御禊は物んあひくもあひくも
の心をあひくもあひくもあひくもあひくも

寛祐法師 源公忠息

教^{しやう}ある^んを^しき^れ出^し後^の徳^人よ^も君^も物^を行^はす^る也^と
後拾遺集十^二卷^二

教^{しやう}あり^しも^しの^くく^く何^しぞ^りん^れ
と^よみ^けり^りる

律師^{りし}志^き意^い
文章得業生^{しやう}章^{しやう}
補^ほ息^{そく}

教^{しやう}あり^し徳^の目^の口^のあ^れば^玉の^徳より^後ぬ^れま^いり^れ
お^しい^りり^りの^くく^くも^し何^しぞ^り
く^れば^よも^んけ^りり^る

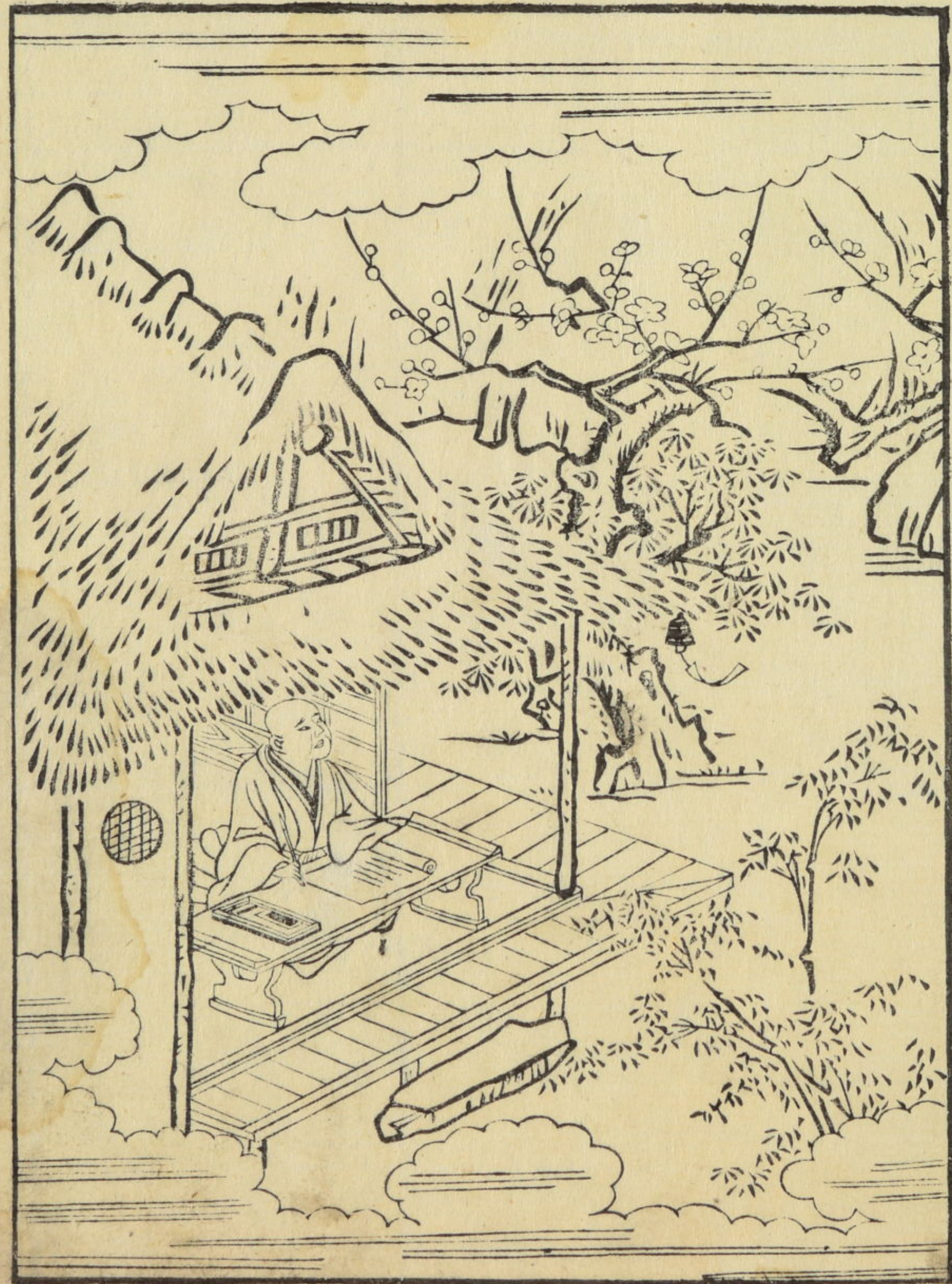
僧都^{しやう}遍^{へん}敬^{けい}

多^た岐^ぎの^國は^清の^もに^らん^ん入^りし^月の^教は^らぬ^り
お^しい^りり^りの^くく^くも^し何^しぞ^り
お^しい^りり^りの^くく^くも^し何^しぞ^り
お^しい^りり^りの^くく^くも^し何^しぞ^り

前^{ぜん}律師^{りし}志^き意^い
字^じ依^い格^{かく}大^{だい}文^{ぶん}司^し云^ん
宣^{せん}息^{そく}山^{さん}門^{もん}

余^よは^そ今^{いま}如^{ごと}く^もあ^らん^徳の^あら^はす^る也^と
今^{いま}集^{じふ}八^{はち}卷^{くわん}下^げ

お^しい^りり^りの^くく^くも^し何^しぞ^り



上三

同集十一卷一

横川の林下なる宇ふ花をまきける時
るまらるる花をまきよみくはらり

仁昭法師 織部正親仲基

世はふけりし横川路のやれ人を忘海の
初集六歌別

牙子にゆりきりし親をくして
はらりるる花をまきよみくはらり

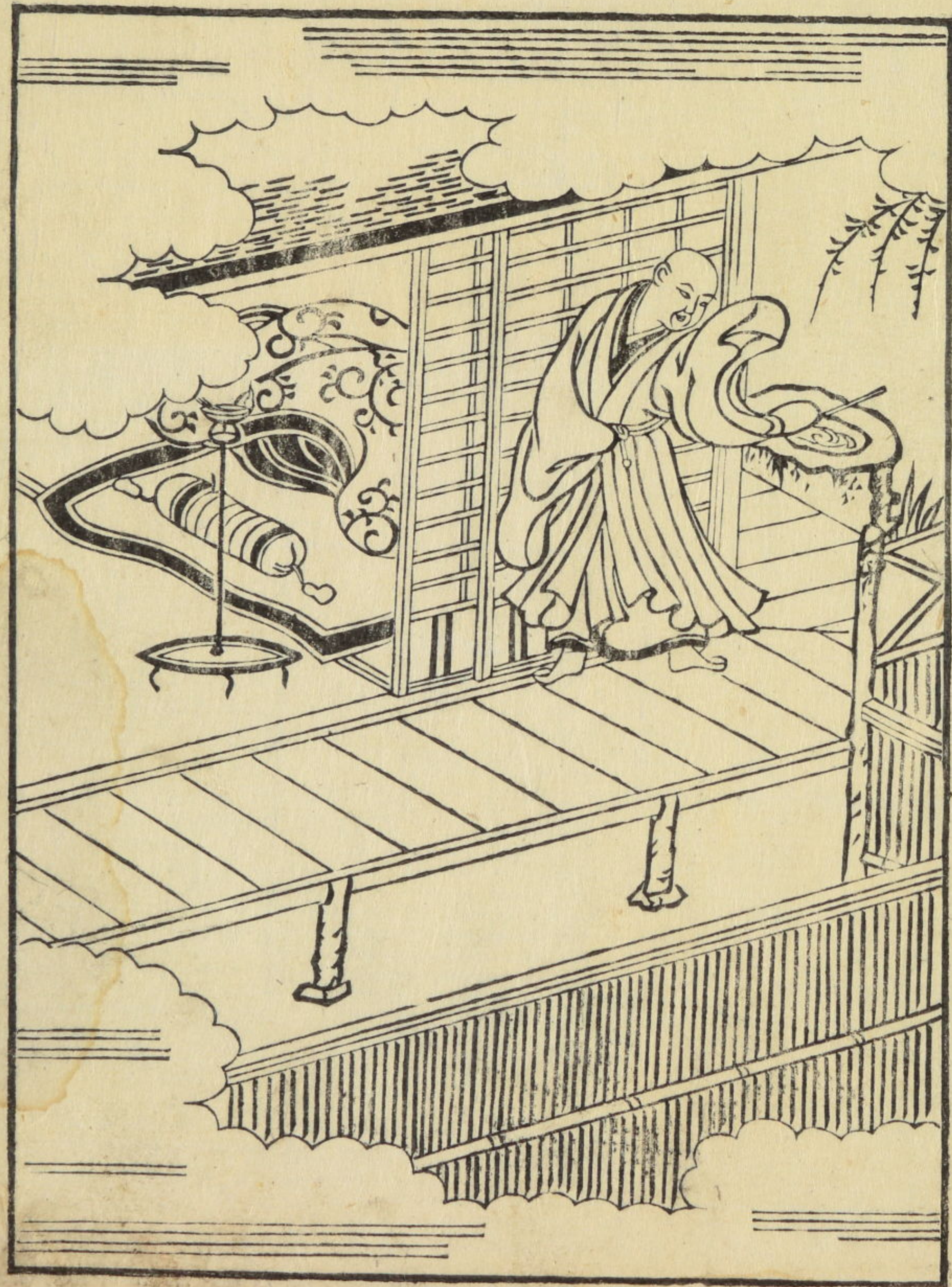
法橋有禅 永祿信子

別路の草葉はなはれ衣をらりし袖
千載集九哀傷

あふ良はゆ後らりし花の
けく花をまきよみくはらり

僧都能玄 佐賀守正業法師

仁事のふれ花のさか川にこの花をまき
此二首中の一は暴乃らりし花
あふ花をまきよみくはらり
し花



上七

新古今集二十釈教

人の身はゆりゆり後結縁経くやう
くろふ即往安樂世家乃んををく先師

駿西上人 早雲居寺上人

昔見し月のひかりとあふ今とて言も悲りあはれん
けきけりゆみ秋夜長ぬ夜よりを略し云
後堀河院の御宇にぬしの駿西上人とて
道子善徳一しりし人しりし水炭末塔乃
る院よりんが院の宰相の律師教戒

といふ人そぞねくく道公望園さん
了然のつくるよ七日こも終り夏
に容貌英兼乃兜の花は香と袖よけ
めるま様をそそのらるんいつと終り
夏のこ身とくまされぬさ地とれハせん
うみこふうれありまうろふと井木の
かたりとてあふあらしく屋儀院乃御
席の座よ立よりまれと二ハぐりあふ
兜れ水魚紗の水干に落紅のあこ免

室のいふ一のまりの不びやふふはら
うらきんばやうならがむとのおろ奇
どてたしむとりのたぞのやとぐ
清子梅の君と一はくごうねとむる
わりのける夏のきとらよたぐりのどん
たふてこそぬい合堂乃縁よひむうて
かろ免あつて

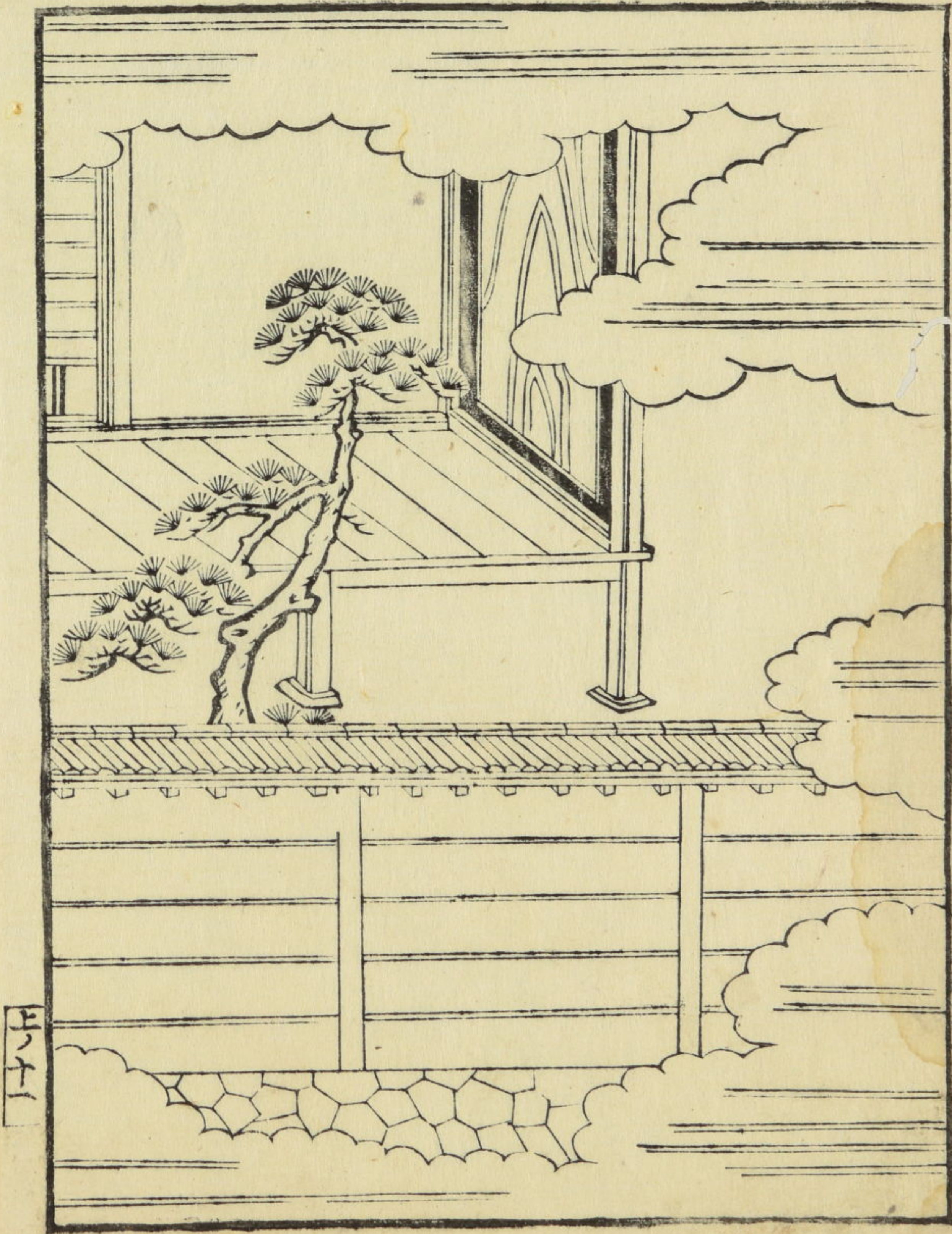
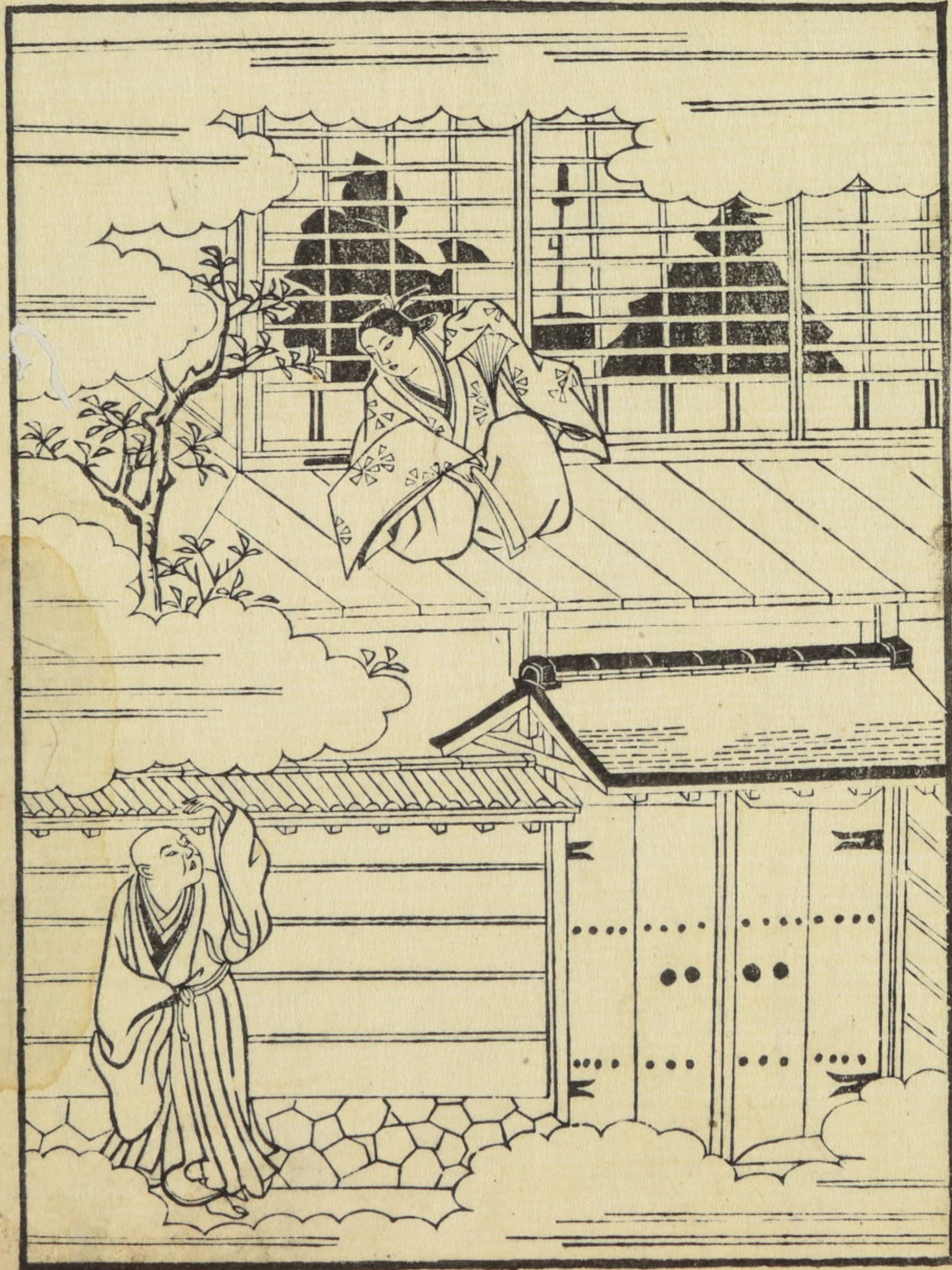
こむや美寄一やうつかいひひし
かいておひはく被君のほくひま

いふもいふもいふもいふも

おきよむかのいふたけいふとふたむとんを
とほの書より被君のいふうていふを
いふたけい

ねぶよ人のいふたけいふとふたむとんを
律師清返事といふとくいふとく
いふとくいふとくいふとく被君より被君して
いふあり

仍のいふとくいふとく我いふとくいふとく



五十一

乃命いかりわんもさしけうきり律師しんの思おもいお
らりて出いるまゝに居いる縁ゆかりをいふに
見みゆらぬとてあつたふりて
たしより被かさす

吾神われのかみの屋やとそん家いへの洞ほらはかき一ひと有ありて

律師きり書院しょいんよりくりりて出い返かへす

まゝに一月ひとつきとふ所の神かみ乃なあつてそそ
ねらりて人ひとあつていふそとぬ一ひと沈しずむ
てあつたふりてあつたふりて

りりけりてあつたふりてあつたふりて
いふそとぬ一ひと沈しずむ
てあつたふりてあつたふりて
人ひとをえりてあつたふりてあつたふりて
ぬらりてあつたふりてあつたふりて
あつたふりてあつたふりてあつたふりて
あつたふりてあつたふりてあつたふりて
あつたふりてあつたふりてあつたふりて
あつたふりてあつたふりてあつたふりて

けいぎのともちりけいけいづらとも知れ
 ういひぬくしてい思うせまりとく
 三井も山門の人はさりなく終よ山門の
 宗徒教戒律師をばめとて女めいの
 答より礼入く甲角八方を切まのり律師
 けいぎふ百餘人ううと散く三井志
 院と若くは火をうけつ新しん種明林の外
 残る所なく焼うういぬさう終よまら
 君とる魚後の病よたとけとてから

して主物のよびのまきゆり出さく
 きれどもりの事おゆく散かく
 らの佛ぶつ國こく殿てん舎しゃのじれくもくしん在ざい後
 院乃門主の由終もさうとらとあくさ
 らきまるとうぬとつわくくみを
 せく由信乃音いりてをて律師乃
 ー

りの身とてにまきゆり海に渡の志とて思きて病の
 とつひやりて浪田乃橋乃下終よまら

入りてうせまりと律師まゝいあぐけら
 ちんぬあぐり思のこははよりあぐり出せ
 血のふらゝをからせとくういれぬぬ
 しもあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 ありあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 うきくく林よりのあぐりあぐりあぐり
 ぬわくあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 ぶぶぶぶあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 ぶあぐりあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり

彼もいぬ一月の名残とあぐりあぐり
 ぶ
 大和物語 在東滋春撰 元弘院浄信撰補 卷三 浄信法師の子
 のうせん乃あぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 うあぐりあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 らあぐりあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 さんあぐり
 うあぐりあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり
 といあぐりあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり

の末のよきとせしむぬゆゑの善ふかきなり其身をたてまつり

定活拾遺物語

一系古の悟養僧中々経輔大師の清子
はく二度大空より入蛇とてはをひひ
の約をひきたしとてあしむぬる相とて
ひひなる人よまんおしけり其清子も兄
師小院とて童ありなる故余りに電を
しめしては師よぬくお登りたり
をよねむびこもそわれとのまふり

童いよひん今志かへりてひりやい
いなる成信正頼いよかへりてかきと
まけきりりい志ぬくぬは師よたりて
かりぬる程よまぬおそりては然
かりなる小僧を人をよしく呪師小院が
思ふなり程の装束いさうことりれま
いゆらぬよいまさゆりりてありて
と免しよまてこれたまひしれま
まびけ呪師小院見若くひるんといふ

くさくさかたしつゝのうめくさく
かきつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
らつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
けつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
をけつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
きりつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
てつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
けつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
うけつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの

くさくさかたしつゝのうめくさく
かきつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
らつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
けつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
をけつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
きりつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
てつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
けつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの
うけつゝのきき^{きき}くさくかきつゝの

岩はら志下

續詞花和歌集牙上志下

九条三位隆教御撰但八重抄法補依二重慶作撰

一院とよのがきせゆははらくる由供よ
ゆくるに悟るものかうてお痛せよをたり
童のちよわらして是くまにせ房をるる
しらひはらかへくは

系後隆孝 中細きふ成書

若くはいひくあるまじの若らふちあつたはら
らげらるるりこのふらふらりては

くろふはくわいそとて

物とてのりけはそぬいなる物さよりの言はるま

同集才十二意中

二房よりぬふらう隣ぢらう人乃許し作り

童に忠いしく物りくらの此月のあつと夜

ついにほくわいそとて

律師延真 延真 後古今他者延真也 谷常孫院傍延真也

よがれは浦のくぐろあひ月々人あははまごり

同集才十三意下

あつとひなるわいを然とてきざりし

いと結まらふ彼童みをおこそと作らる

み落る童よと書りまされど

信都覚基

うす墨のうみてぬぬ君いふはらひぬいし

同集才十四別

あひ志まらりるりしこのしらけ圓すまうり

やんこくろふ月乃あつと夜人々別

惜とてあつとみくらの

實叡法師

世に出よと世の月れ光とて世もさるぬ金によそもた
同集才十八雜下

あつとほよひえのこよのぢりてゆるるふ
うりかんといけるおきゆるふうとて
とよきれが書とてうらひとて

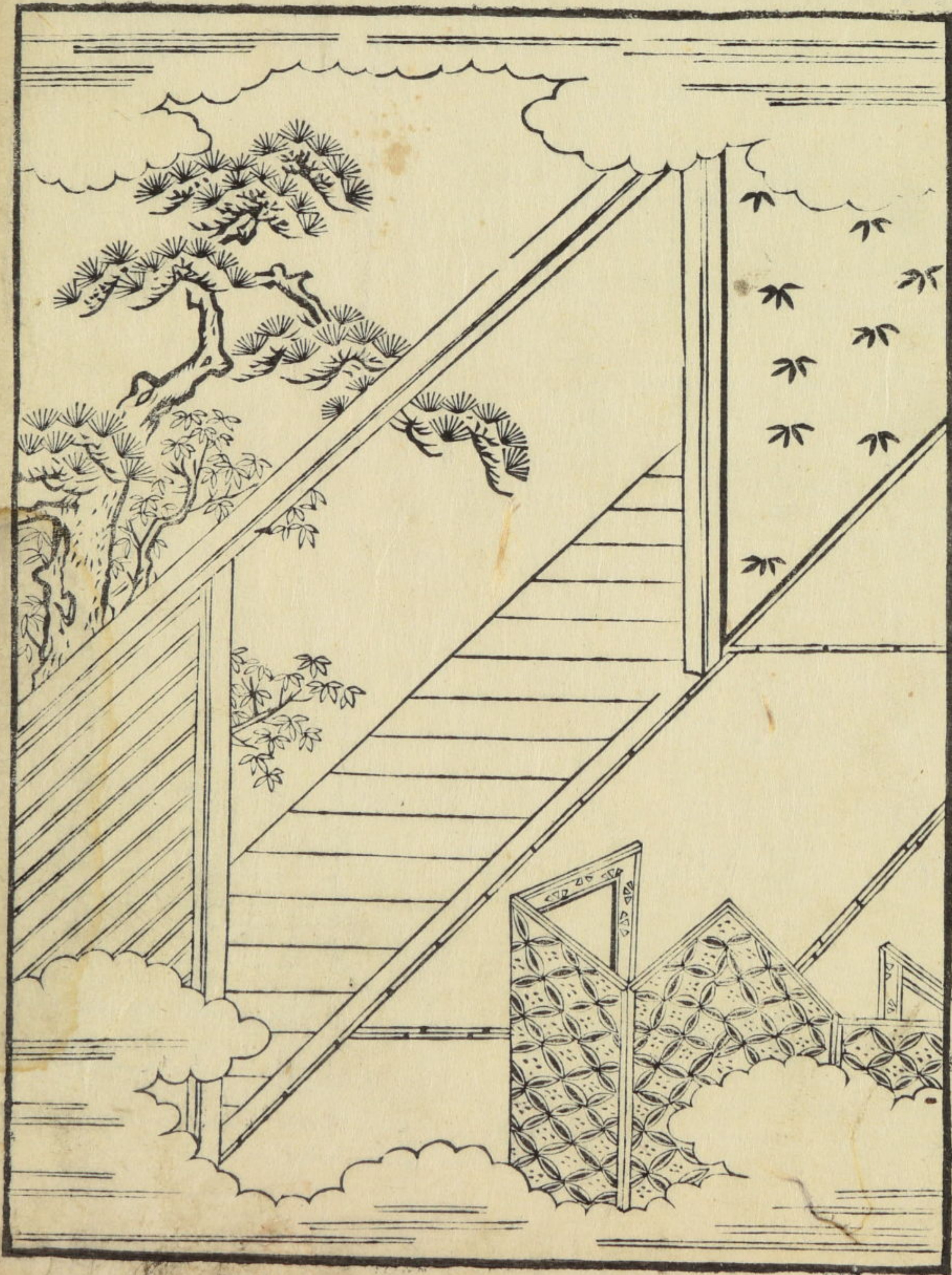
静叡法師 合衆千載集 作者

うねいにかもさるぬ身もさるぬものうらとまうめつたれ
雜の致ぶ乃うとあぐり別を惜まぬあまも

志ちいいとと実じつよよ書しよつつ移しよくく智ち愚ぐ乃の明めい毎まい
ととすすののののちちり

袋ふくろ双ふた糸いと云 若原法橋師長之説也 中納言經家息

美み如にょ院いんのの信しん教きやうととああのの定じやう親しんのの孫まごなりあ
ううとと一いつ時とき錦にしん織おり乃の信しん心しん行ぎやう親しん乃の本もとにに孫まご織おり
八はち節せつとといいつついいををゆゆききととゆゆららりり被ひきき
齊せいののいいははははざざららををれれととけけ信しん教きやうせせららにに
ととおおたたととけけららままききれればば致ちよよじじりり若わかきき
ここええらら信しん教きやう三さん舟ふねももぬぬゆゆららるる程ほどり



下三

人いぢふくふんまのしと目^ちの三後のも
とふゆぬい^かのい^まのい^まのい^まのい^まのい^ま
り^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り
入程^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り
相^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り
あ^りのお^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り
秋^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り
た^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り
る^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り

をよむい^りのい^りのい^りのい^りのい^りのい^り
~~~~~

い<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>  
當<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>  
げ<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>  
梨<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>  
で<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>  
さ<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>  
を<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>のい<sup>り</sup>



う続くは命をあらわす物めづからん世にほしき事  
あり  
度々返事

惟だれとてぬ命に頼りてゐるでん今やわらぬ社とれ  
演説とていつい事の四年九月廿日ぬ補經のまよ  
うねくおんは奇

慈心上人 清豪

をてたるもよぶは遠社とれ泪をよするおのまねい  
横川の是起信教導師とてこれを和する  
世の中ふあつひとなら我がまよめく世にまよる  
拾玉集第五 慈心信正集也

千のこゝとて思のわらふんとするくとめて  
を事やまじきむにいつつとて

古今著聞集云 橋南袁撰之

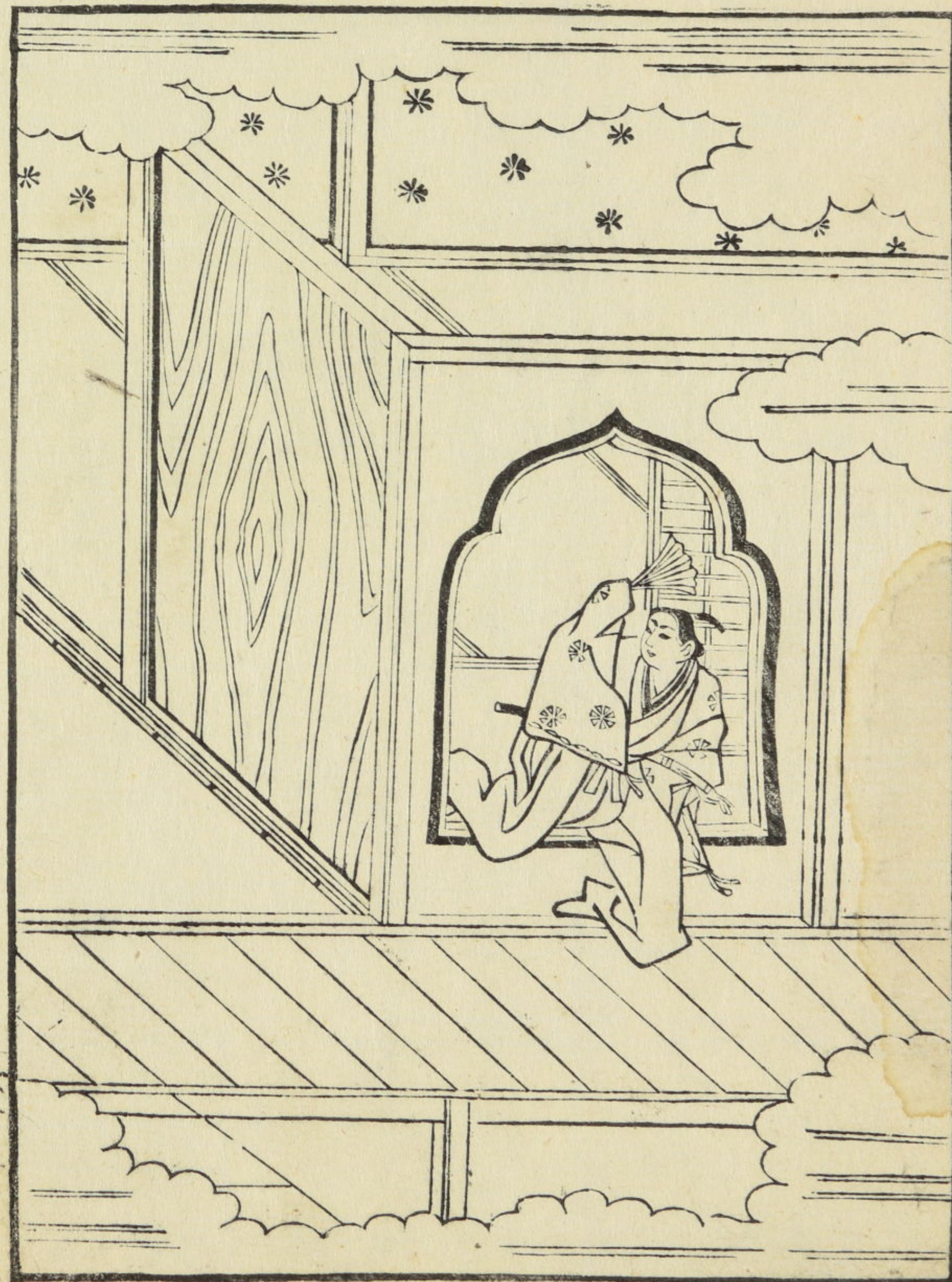
はるかに堂寺清室に千のこゝとては山籠り  
つらかりは月よくくは優かりまの  
吹今やうたごうとていけむはわら  
甚しうりたる程よとて海とて無事  
このまの筆に奇蹟ありまの



籠<sup>かご</sup>ありて千<sup>ちとせ</sup>はびくさくさくしつらりにき  
まじりて月<sup>づき</sup>かきやまひかん退<sup>まうた</sup>きくく久  
きくまじりたりあは日<sup>ひ</sup>酒<sup>さけ</sup>を飲<sup>の</sup>む  
みくはく<sup>く</sup>の津<sup>つ</sup>遊<sup>ゆ</sup>ありきるふ津<sup>つ</sup>子<sup>こ</sup>  
乃<sup>の</sup>手<sup>て</sup>是<sup>こゝ</sup>は親<sup>おや</sup>主<sup>ぬし</sup>たもも其<sup>その</sup>屋<sup>や</sup>は押<sup>おし</sup>しは  
して子<sup>こ</sup>ひつたごららんやらんあして  
あふらせんやうまごころをいりてやと  
しとせあしきまれの則<sup>すなは</sup>由<sup>ゆ</sup>使<sup>つか</sup>とほらけ  
先<sup>ま</sup>とせくるふは程<sup>ほど</sup>可<sup>か</sup>勞<sup>らう</sup>のこゆるて糸

らざりきり津<sup>つ</sup>使<sup>つか</sup>毎<sup>まい</sup>三<sup>さん</sup>よるじまればさ  
のこり細<sup>こ</sup>りあてて糸<sup>いと</sup>にくり花<sup>はな</sup>紋<sup>もん</sup>紗<sup>しゃ</sup>  
乃<sup>の</sup>あ面<sup>めん</sup>は水<sup>みづ</sup>千<sup>ち</sup>に神<sup>かみ</sup>は村<sup>むら</sup>小<sup>こ</sup>森<sup>もり</sup>は荏<sup>じん</sup>乃<sup>の</sup>  
居<sup>い</sup>らるゝとあはりくるは<sup>は</sup>すそこの務<sup>む</sup>  
を<sup>を</sup>あはりてあはるやうふらうとたされ  
ども物をあはりてあはるやうとあ  
つらりてあはるやうは津<sup>つ</sup>室<sup>むろ</sup>の由<sup>ゆ</sup>前<sup>まへ</sup>は  
由<sup>ゆ</sup>益<sup>えき</sup>を<sup>を</sup>あはるやうおはるやうとまれば人  
と千<sup>ちとせ</sup>はよ今<sup>いま</sup>やうとすまはあはる











よ由公乃親と云ふくかく徳く作りたるふ  
うそはく清くあはひまけまはり方志は  
ぬよくりきききいのがりて法師よかり  
ふきりともやゆきくは

徒然草云

妻の言つこのどやうふ徳なるをよりや  
しつぬ家乃れくふく木立地がりの  
庭よ散志をれらるる花んさくくをさ  
し入く見れども面の梧子なるおかし

下九

寐げありに東よじとて毒戸のしれ  
程よあきくは清く簾の破きより見れど  
くから清げあるおのこねとて女計を  
おとけされど公あつこのどやうあるは  
十て札のうよ文をしらむぎて入るあり  
いある人なりらん思ひのまらまら  
あや一の竹乃あま戸の地よりいとあ  
は男乃月影みまふあひらごらあ  
どはやあつたなりかりまぬよこら指費



いふ故づきいふ程もそあやうあり  
いしりどごとくしてけらる女田の中の細  
ろと稲葉はあめそわらつて分の行程  
蒲伝えあはれ吹とまひらるる歌と夢  
知はま人もあどとあまよふんこ志  
らまふくく見とらつてゆきとる蒲  
とつ吹屋とてこのまはよ物のある也  
し入ぬ

羅山氏抄云は陸とよの陸と云れ

東坡が李節と尋のそ風水洞の程  
びー系のあつちうはそとけり男  
色ののり歴代乃中み多くんて  
つま

古人未茶の程いあづらうまれば用  
らく愛み書かけりけ外仁和ち  
の書は法師よあんとする金波と  
てをのく遊ぶとまかりようい  
かりゆきいふとまのりは



しつとさそい出せてあそびんとた  
くまは師みくちたど書りく服も思  
をむせし事かぐろのそと優を  
福じとくばれけ敷あまこゆり

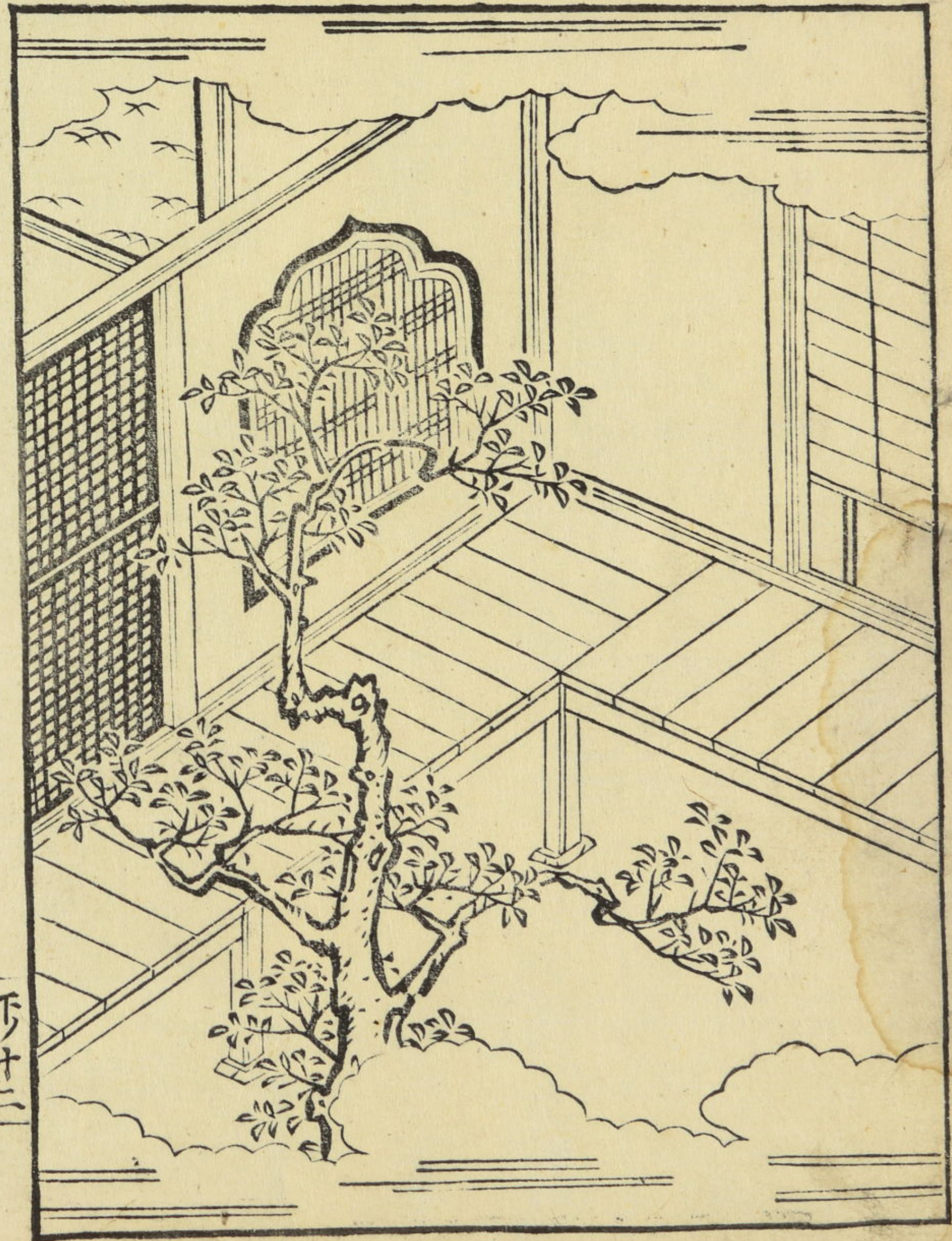
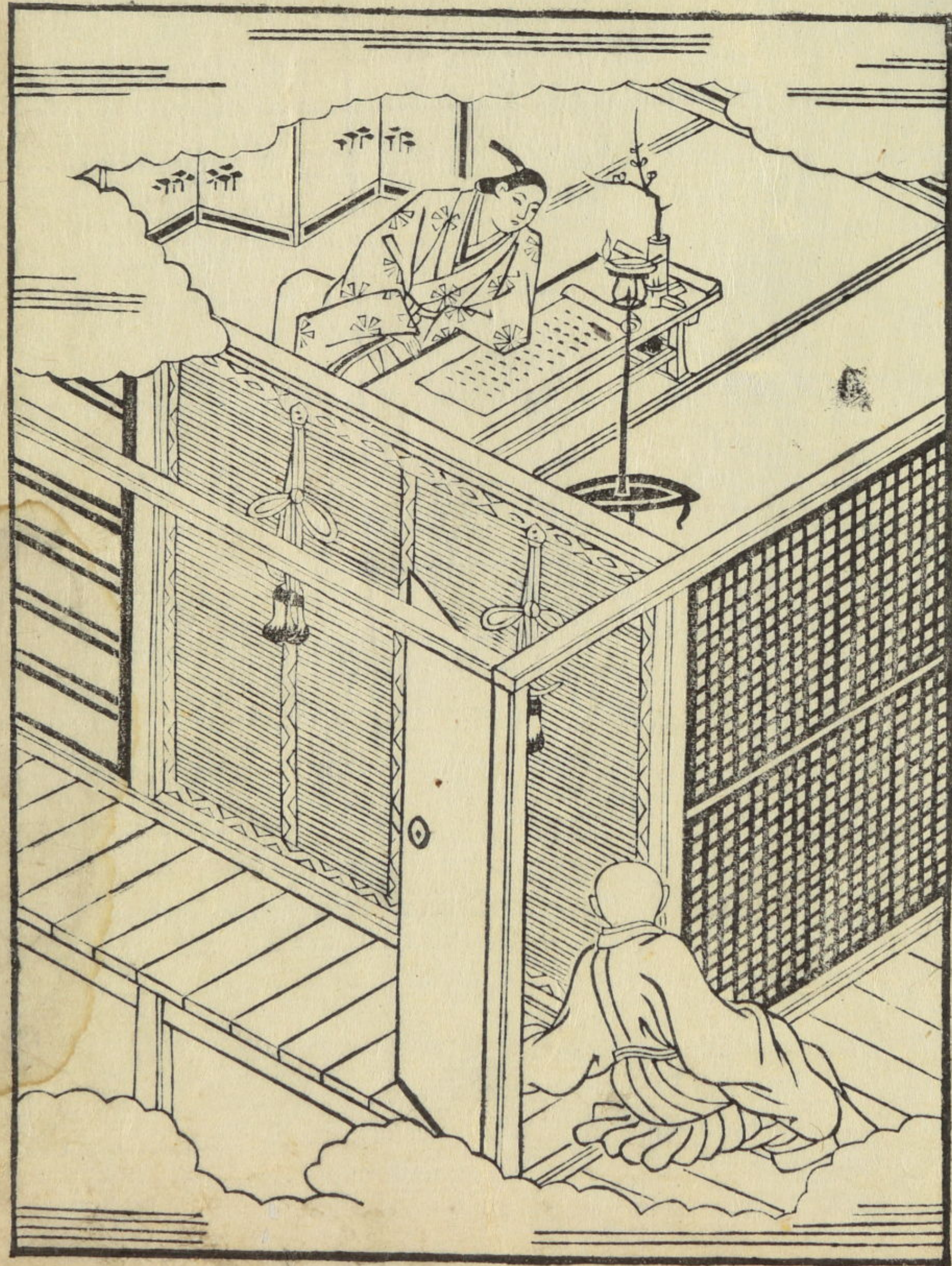
松帆物語畧云

公卿の身は侍後の君として十宮ありて優  
み情を一人を思念余乃宰相おけ師人  
志はどおして三衣よぬぬそ母乃  
相國の清子大將殿け侍後の君とま

侍くせしそこし給ふ母常のうしとて  
義り給ひのば又月毎の比あるふ  
侍きくもすん結こ成君ふくもりありぬ侍  
ん比とくしはじくぬ給りて事給くと阿  
の事なれど

あつぬの晴るもあつぬ君がわたりかこ同さん侍を  
け侍後のうくもいふはも彼宰相おけ  
師がまごかりとて又服まつくはわたり事  
お侍師を侍後の松帆乃浦よ退散つ







侍後の兄の中およわいおこしにて侍後  
 の君は我殿みじくうらうらうとさくは  
 せじまんとくくおの由心とく知  
 しくろくおんぞくおまお基もみ  
 そまび罪をくしてうためする事おは  
 師がじくくの言ろくおん中まきく  
 一けまび事おがま念にくありま  
 土佐とくおは師をくしておびておび  
 ま出ろく松帆の浦とあひまはり次

六の浦とて光源氏の公はくく乃松風  
 をおのい出く  
 秋風よ公はくく我神やじくくおらはくくの浦波  
 ちどくお極ちらくくおのくは後よこして彼  
 ち極中細くろくおやりのちくよま  
 ちく浦されく身もくがれつくはまが  
 こ君のまあくくあらし屋よむ候乃  
 松の葉ふとくしておくろあらしは  
 てまよりく事おは師の約束と同ま











いふので初の花は残のきん移うつろひをそし人のをみ  
世に秋よ知れどくまこころにたりきり  
しめしむるまゝあり

正徳三癸巳年三月吉祥日

帝都

書林澤田吉左衛門版

思所く志の二帖ハ他人のうまはとも及ぶぬと  
水村季吟老人乃述作し終ふ書とて頃の年  
人のうまよりなるまはひはゆりしる序乃云  
いへて考みりてあそいゆるまはひは武河居士見  
母子両方法師の披見よ今もゆるふらの師は云  
け一草いはずこむもなまゝ人の撰定よいわ  
はりししにも集記をくれり後よ男色と好  
多る人の多きと歎歎とするよ是れ人のまゝの也  
と是よりして抄のまはひはこころにきり



中ん佛の道よも志あてりて先なる教入國  
の志地と申ふはひそくは情を志れん  
児童もたふんそれく世の人け入奥より  
かり終りと今亦くに畫圖と加へあつら  
つてあておこちふりあつたり

干時正徳弟三曆

仲春日

洛邊散人

萱草生行書之



